私の戦争体験

久留米市　　西田　初次

左上肘貫通爆弾破片創　同上肘複雑骨折。これが私の負傷につけられた傷病名です。

時は昭和２０年８月２５日頃です。「軍医殿切断だけは許して下さい、お願いします、お願いします」と私は哀願しました。しかし軍医はレントゲン写真を見ながら、「お前の左腕は何の役にもたたないぞ」と言う。「私はたたなくても良いです。動かなくても良いです。私は今２０才です。これから先どうやって生きて行けば良いですか。戦争に負け左腕を切断され、身体障害者となり、軍医殿切断だけは」と私は必死でした。幾度も幾度も頼み、切断だけはのがれました。所は海軍病院、「甲子園ホテル」が臨時の海軍病院になっていました。

８月の終り頃、私達２０名程は陸軍関係で大阪鶴橋の大阪日赤病院に移送され、病院生活が始まり、１回目の手術を受けることになり、「神様どうか腕が治りますように」、全身麻酔による手術。気づいた時は包帯でまかれていた。しかし結果は悪く、再度手術を言いわたされる。全身麻酔による。また駄目、３回目、もういやになる、どうにでもなれ。当時進駐軍（敵国）の兵隊で日本の捕虜となり働かされていた傷病兵が入院するので、中病棟を明けるよう、命令あり。堺の第一病院へ移送され、とうとう３回目の手術はできず。ここも再び進駐軍の撤収で１週間程で大阪陸軍幼年学校へ移送され、敗戦の悲哀をしみじみ感じる。学校跡で何の医療設備とてなく、治療とてなく、日は過ぎて行く。どれだけの患者がいやな想いにかられたことか。

「君達が希望する病院へ送るので申込せよ」ということになり、私は久留米の病院を希望するも、他の人が福岡病院を希望したので、衛生兵に護送され福岡陸軍病院に入院する。日赤より第一病院、幼年学校跡、福岡病院と治療もしないまま月日は流れ１１月となる。３ヶ月ぶりに風呂に入った、何だかこわい。傷は治療しないままに塞がってしまう。１１月の終り頃、別府の病院に転院し、リハビリをさせられる。動かない腕を無理やり動かされる。私は転院した事を両親に知らせた。両親と叔母が面会に来てくれ、嬉しかったが、また悲しかった。これから私が一生懸命働いて、年老いた両親に孝行して恩がえしをしなければならぬのに。でも両親も叔母も生きていた事に喜んでくれ、よーし頑張るぞと勇気をふるいたたせる。早くよくなって見せるぞと。

私は昭和１６年１２月８日は神戸の新開地で店員として叔母の店で働いていました。戦争になるや、翌１７年３月２６日徴用され、大阪陸軍被服支廠に入廠させられました。ちょうど大阪城の横にありました。１７才の時です。

被服支廠ですから、勿論兵隊さん達の被服関係の仕事を２年、１９年４月頃、西宮の酒倉に分散入庫のため、転属させられ、同僚１５名と西宮に参りました。酒倉を借り、物資を積込み働くうち、１９年も暮れ、２０年が明ける。戦況は我に利あらず。大阪、神戸はＢ２９の空襲

を受け、廃墟と化しつつあった。大変な事だ、私達は軽重隊に頼み、トラックで山手の田に野積を始めました。シートをかぶせ、木の枝で偽装をしましたが、何回もグラマンの機銃掃射を受け、九死に一生を得ました。大都会は焼野原となり、いよいよ中小都市が標的になりつつありました。その間には毎日毎日が緊張の連続で、服を着たまま寝ていました。

昭和２０年８月６日午前１時頃、西宮大空襲となりました。私は猿若倉庫へと急ぎました時、ザァーと大雨のような音、ふと見上る空にピカピカと光りながら落ちてくる。爆弾、焼夷弾、危ないと防空壕に飛込む、と同時に爆風と左肩に激痛が走った。「ヤラレタ」これが実感でした。左肩よりものすごい出血。猿若倉庫に行けば同僚がいる、治療がしてもらえると、ブラッと下った左腕を右手でかかえ倉庫へ、警備についているＡ君を声をかぎりに叫んだ。しかし応答はない。早く出血を止めねば出血多量で死が待っている。私は床屋に飛込んだ。夫を戦場に送り、子供３人を育て、店を守って頑張っているオバサン。ヒマな時散髪を頼んでいた。幸いにもここはまだ焼けていない。「オバサンヤラレタ、このタオルで肩をしばって下さい」オバサンは異様な血だらけの私を見てビックリ、早くしばって下さい。力一杯しばってくれた。「オバサンこれから夙川の事務所に行き、倉庫長に報告に行かなければなりません。浜が近いので浜の方に逃げなさいよ。生命があったら会いましょう」と言えば、「そんな身体で行けるか」と気づかってくれる。オバサンと子供達が無事であることを祈りつつ走り出す。

もう西宮市内は火の海、東も西も南も北も。市役所前に出る。地獄とはこの事か、逃げまどう人々の群れ、国道２号線をこえ鉄道線路へと出る。稲田の畦道をようやくにして抜け、夙川の事務所にたどりつく。私は倉庫長に現況を報告すると、気がゆるんだのか倒れた。同僚達はビックリ、ローソクの灯に血ダルマの私の姿に２度ビックリ、服を切りさき、タオルをはずせば、また出血、敷布をやぶいて、左肩を幾重にもしばる、白い敷布も見る見る真赤に染る。負傷してどのくらいの時間が過ぎたのか。よくぞここまで来た。安心したのか、のどがかわいて水がほしい。「加藤さん水を下さい」、「水を飲んだら出血して死ぬぞガマンしろ」、「お願いだから少しでいいから」。「いかんガマンしろ」と「死んでもいいからくれ」。頼んでも誰もくれない。熱が出て来たのか。誰か氷枕を頭にのせる。私は氷を１つ口に入れる。その氷の冷たくて美味しいこと、果して氷に味があるのか、今でもわすれない、氷のオイシカッタこと。夜が明け、消防車に乗せられ、救護所へ、そうして海軍病院へと入院となりました。私は帰郷後少しづつ野良仕事を始めました。辛い、苦しいあの時、死んでいた方が良かったかなと思う日もありました。５０年の月日は流れ、７０才になりました。御陰様でほとんど治り、毎日毎日を感謝の気持で一杯に暮しています。５０年前、もし切断していたらと思います。残りの人生を悔いのない人生となることを祈りつつ、平凡な生活に、２度と戦争のない日々を祈ります。